

音楽を愛好する気持ちを育てる
音楽学習のあり方について

— 小編成グループの演奏発表会を通して —

浦添市立港川小学校教諭

黒 島 廣 子

目 次

| | | |
|-----|---------------------|----|
| I | テーマ設定の理由 | 1 |
| II | 研究の仮説 | 1 |
| III | 研究の内容 | 1 |
| 1 | 音楽の目標の分析 | 1 |
| 2 | 実態調査 | 2 |
| 3 | 音楽と心の関係 | 6 |
| 4 | 音楽とグループ学習 | 7 |
| 5 | 音楽の生活化 | 7 |
| IV | 授業実践 | 8 |
| 1 | 題材 | 8 |
| 2 | 題材設定の理由 | 8 |
| 3 | 指導目標 | 9 |
| 4 | 教材観 | 9 |
| 5 | 学級の実態 | 10 |
| 6 | 指導計画 | 10 |
| 7 | 子どもを主体的に動かす教師の援助・支援 | 13 |
| 8 | 本時の指導 | 14 |
| (1) | ねらい | 14 |
| (2) | 展 開 | 14 |
| | ＜事後評価＞ | 16 |
| V | 研究の成果と今後の課題 | 18 |
| | ＜終わりに＞ | 19 |
| | ＜参考文献＞ | 19 |

音楽を愛好する気持ちを育てる音楽学習のあり方について

——小編成グループの演奏発表会を通して——

【要 約】

子どもが主体となるよう、子どもが興味を抱く教材の選定・グループによる協力学習・演奏発表授業等を取り入れ、学習内容とともに音楽への感動が子供の中にしっかり根付くような授業を工夫した。また、音楽を楽しむことは集団的・体験的なことと関わりがあり、グループアンサンブルに取り組ませ、仲間と協力し、感動を共有する経験を味わわせ、音楽への愛好心が育っていくための音楽学習の1つのあり方を追求した。

キーワード

グループアンサンブル 主体的協力学習 演奏発表授業 選択曲開発 音楽の生活化

I テーマ設定理由

子どもの中には、音楽の好きな子、音楽に興味のない子、歌は好きだが楽器が苦手な子、あるいは逆のタイプの子等がいるようだ。また、子どもに「何で音楽が必要か」という問いを受けたことがある。このような子たちに、どのようにしたら音楽の楽しさを伝えられるだろうか。

どんな時に音楽を楽しいと感じられるかを、自分の体験から考えてみた。つぎの3点がある。

- 1 いい音楽に出会う。感動体験をもつ。
- 2 自分なりに音楽を表現できる。
- 3 自分の音楽が他人に認められる。

毎時間の授業で、子どもに一人ひとりが上の1つでも感得できたら、音楽が楽しくなり主体的に音楽学習に参加していくと考える。音楽の目標に、「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽の基礎を培う」とある。どの子にも音楽の表現ができるでだてとして、基礎的なことを身につけさせることの重要性が指摘されている。2の、自分なりに音楽が表現できるということは、これまでに身についた音楽の基礎的な技術の充実が前提となる。

今回、グループアンサンブルに取り組み、発表会を持つという授業の設定にしたのは子ども主体の学び合いの学習のなかで、基礎・基本の定着を計り、それをもとに個に応じた表現を実現させたいという考えからである。また、発表会という目標に向かって子どもたちが生き生

きと音楽活動を展開し、それをやり終えた達成感が1つの実体験として子どもの心に残るならば、音楽を愛好する気持ちが育つ第一歩として踏み出したことになるのではないか。

以上により、本研究では、子どもが主体的に音楽に関わり、音楽を愛好する気持ちを育てていくことのできる教師の援助・支援の方法を研究するため、本テーマを設定する。

II 研究仮説

小編成グループにおいて、子どもが主体的・協力的に取り組み、一人ひとりが個に応じた表現ができ、それが演奏・発表の場で認められたなら、音楽を愛好する気持ちが育つだろう。

III 研究の内容

1 音楽の目標の分析

(1) 音楽科の目標

- ① 表現及び鑑賞の活動を通して、音楽性の基礎を培う。

「聴くことは、内面で積極的に歌うこと」といわれ、また「歌うことは、内面で第三者として客観的に聴くもう一人の自分が存在すること」といわれる。このことは表現と鑑賞が表裏一体であり、両者が常に同時に存在していなければ、真の音楽の表現あるいは鑑賞はありえないことを示している。

音楽の授業でもこのことによって始め

て音への気づきが深められ、音楽性の基礎が培われると解釈する。教師は常に、表現と鑑賞が一体となった音楽活動がくりひろげられるような授業への配慮が必要である。

- ② 音楽を愛好する心情と音楽に対する完成を育て、豊かな情操を養う。

子どもにとって好きな音楽は、ひとりひとりの個性が違うように、幅広くいろいろあって当然である。音楽学習は子どもの実態をしっかりつかんで、そこから出発すべきである。その子どもの好きなことを認め、それを発展させたり、伸ばしてあげると共に、まだ未知の音楽の分野も体験させてあげることである。そのとき重要なのは、子どもの主体性が重んじられ、そのなかで自らつかみとらせることである。さらに大事なことは、それぞれの体験が単に内容習得に終わるのでなく、感動的なものとして子どもに残るよう、教材研究・実態の把握・指導法の工夫等を留意したい。

これらの経験を長期にわたって、連続的に、計画的にくり返してはじめて、音楽を愛好する心情がめばえ、同時に音楽に対する感性も育ってくるものと言えよう。

音楽を楽しむ、あるいは音楽を経験することは、孤独な行為ではなく、社会的なものである。より深く音楽に感動できることが、社会を肯定する気持ちを育み人との調和を大事にする「豊かな心」「豊かな情操」を養うことへつながる。

(2) 6年生の目標

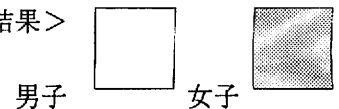
- ・ 音楽の美しさを味わい、音楽活動をしよとす意欲を育てる。
- ・ 音の重なりや和声の聴取と表現に重点を置いて、表現及び鑑賞の能力を育てる。
- ・ 音楽経験を生かして、生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣をそだてる。(生活化)

5年生までに築き上げた音楽性の基礎を土台に、さらにより高度な、より深みのある音楽活動への意欲をもち立てる。そして、自ら求めてより積極的に生活の中へ音楽を取り入れ、楽しむことのできる(自立した音楽活動)レベルをめざしたい。

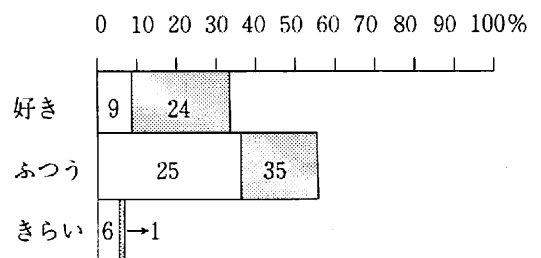
2 実態調査

- ① 調査目的…児童が音楽の授業に対してどう感じているのか、また音楽に関する悩みはどういったことがあるのかを把握する。
- ② 調査対象…6年生全クラス(男子89名 女子84名 計173名)
- ③ 調査方法…選択肢及び筆記による質問紙法
- ④ 調査期間…平成7年 6月上旬
- ⑤ 集計と分析…学年全体、性別

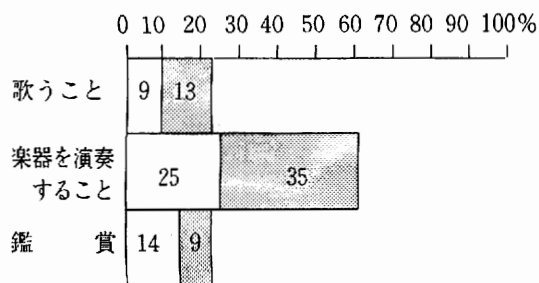
<アンケートの結果>



- (1) あなたは音楽の授業が好きですか。

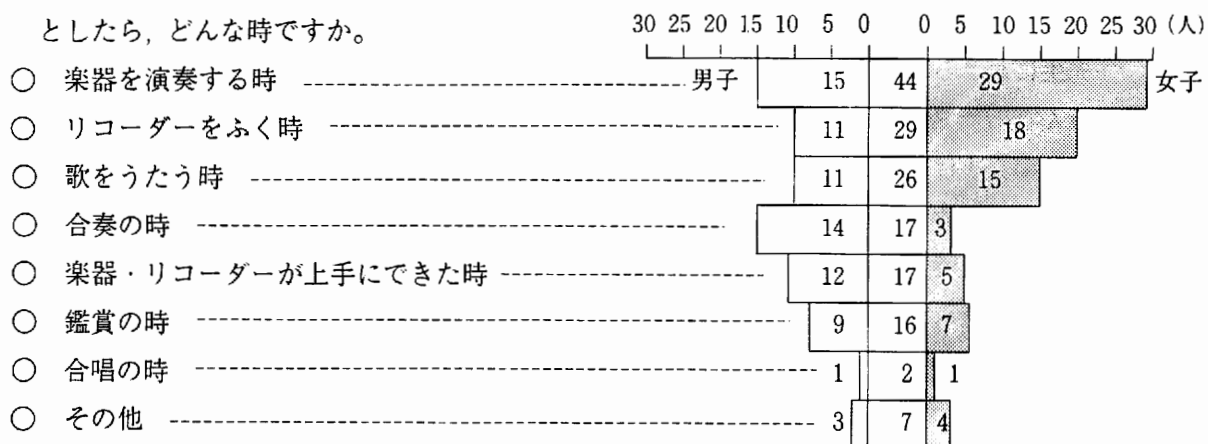


(2) 音楽の時間で好きなことは何ですか。



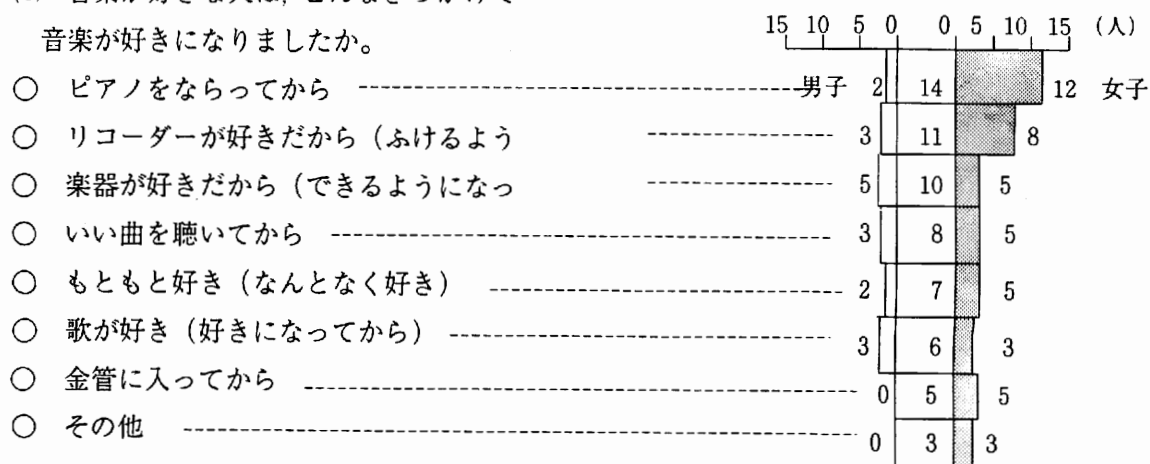
(3) 音楽の時間に楽しいと感じたことがある

としたら、どんな時ですか。

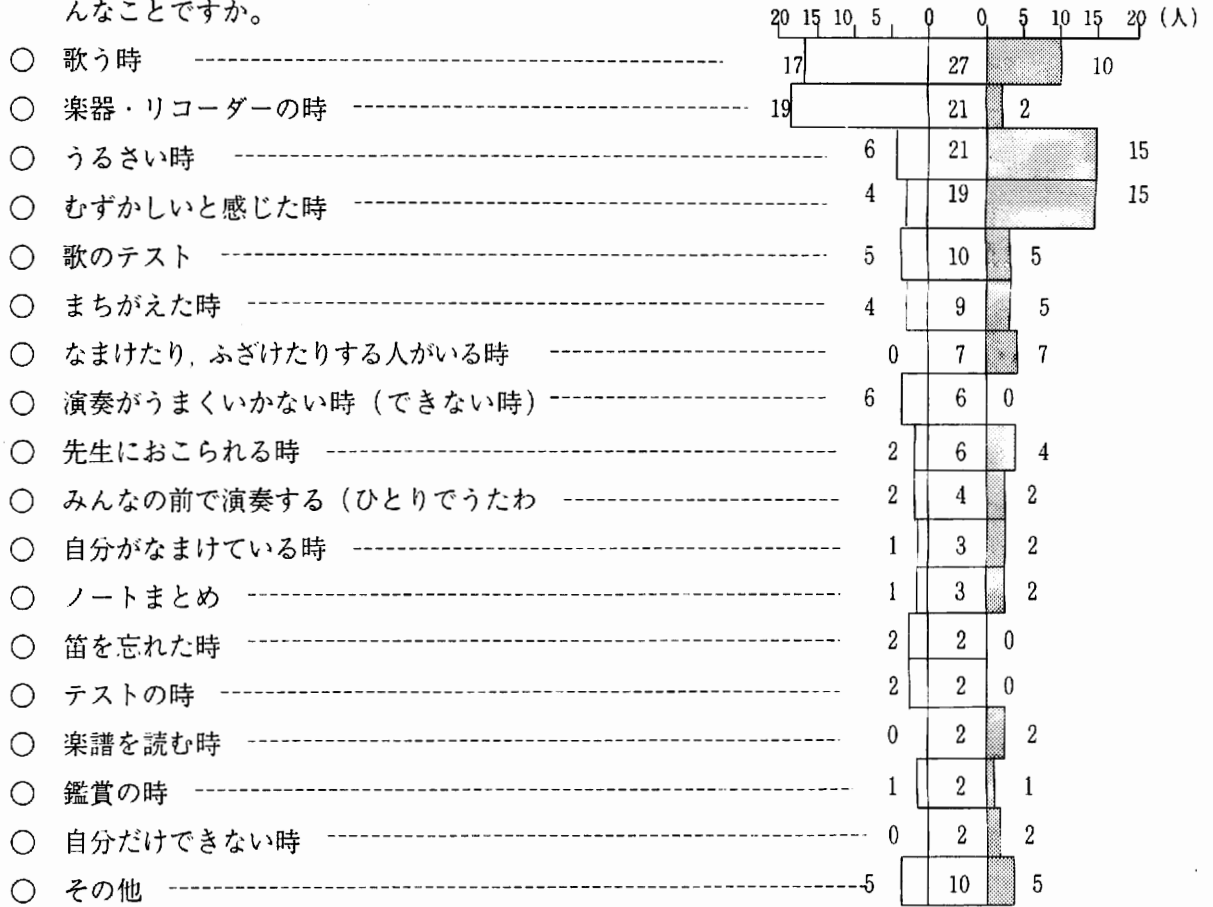


(4) 音楽が好きなのは、どんなきっかけで

音楽が好きになりましたか。

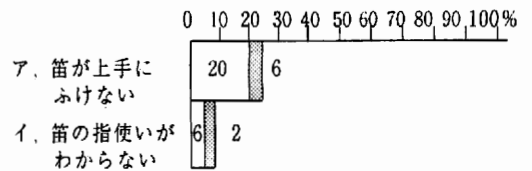
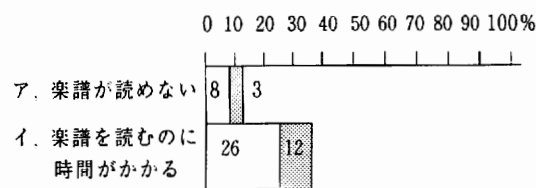
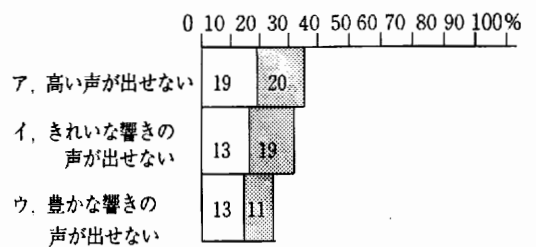


(5) 音楽の時間にいやだなと感じることはどんなことですか。



(6) 音楽に関する悩みは何ですか。

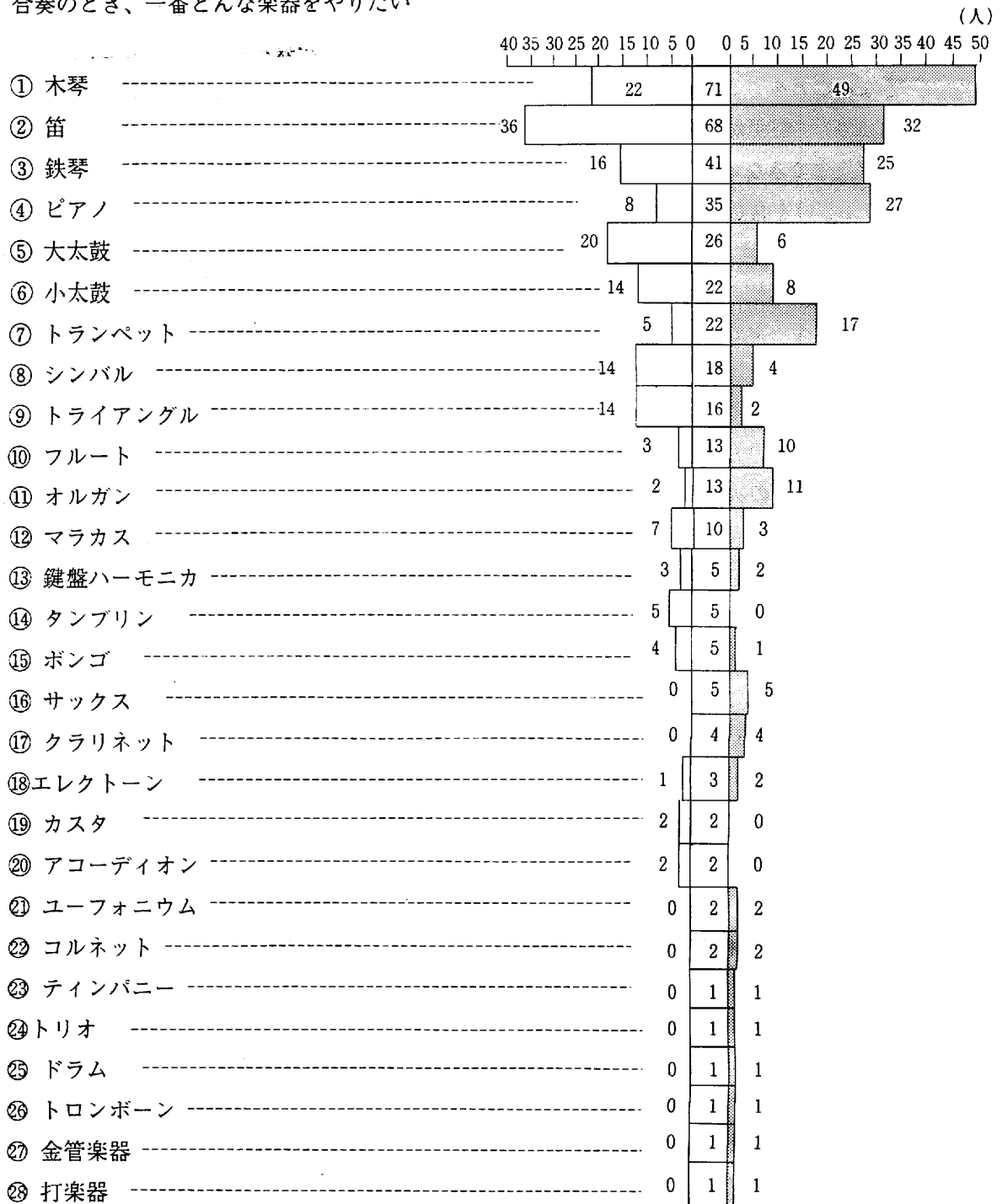
男子 女子



その他

- ・ 歌をうまくうたえない（女子1）
- ・ 笛の持ちかたで左右が逆になっている。（男子1）
- ・ 笛と木琴・鉄琴以外の楽器はあまり上手にできない。（男子1）

(7) 合奏のとき、一番どんな楽器をやりたい



<アンケートのまとめ>

- ・音楽の授業が好きと答えたのは女子が圧倒的に多い。
- ・男女共、歌うことよりも楽器を演奏することが好きな子が多い。
- ・音楽が好きになったきっかけは、ピアノを習ってからという子が一番多く、楽器や歌が好きになってから、いい曲を聴い

てからという子が多い。また、好きになる前提として、その楽器ができるようになったこともあげられる。

- ・音楽の時間で楽しく感じるときは、楽器を演奏する時と答えた子が多い。また、上手にできた時、何かができた時もあげ

る子が多い。

- ・音楽の時間でいやだなと感じる時は、できないことをさせられる時（歌も楽器も含めて）、むずかしいと感じた時、みんなが集中できない時（おしゃべり、なまげ、ふざけを含む）だと大多数が答えている。
- ・音楽に関する悩みの中で、男女共、声に関してなやみを持つ子が多い。また男子は、ぜんたいの3分の1くらいが読譜に対する抵抗を感じている。
- ・合奏の時にやりたい一番人気のある楽器は木琴で、その次にみんながよく慣れている楽器である笛が多い。打楽器は男子に希望者が多く、メロディ楽器として使えるピアノ、オルガン、管楽器等は、女子のほうが多い。中には、演奏したことのない楽器にあこがれて、やってみたい、ふいてみたいという子がいる。

<考察>

- ・楽器を演奏することが楽しい子が多いが、技術的な個人差もあるので、器楽を取り入れた、教え合い、学び合いのできるグループ学習が効果的である。また、いろいろな楽器を子ども自ら選択できるよう、小編成の器楽合奏を取り入れたい。
- ・音楽学習そのものに楽しく集中でき、できるまで練習し、成就感を味わえるようにするためにも、演奏発表の機会を与えたい。
- ・読譜に対する抵抗のある子のために、階名付きの楽譜を与え、楽器の練習そのものに集中できるようにしてあげることが必要である。

3 音楽と心の関係

音楽に感動する心とはいったいどのようにして生まれてくるのだろうか。

実際の授業の場で、これは良いと思う曲を子どもに聴かせたとき、子どもの反応が予想

外だったりすることがある。目を輝かせている子が数人いるかと思うと、全然興味を示さず集中していない子も目にする。これは子どもの音楽的発達が一ひとりひとり違うため、聴く力に個人差があるためだといわれる。音楽的発達に認知過程があり、子どもはそれぞれの段階で獲得された力を通して音楽を理解していくのである。

ところで、よく知られた曲や、コマーシャルなどの曲は子どもがとびつきやすいということがある。だからといって授業のなかで始終こういった曲だけを扱うわけにはいかない。ある曲が子どもに受容される時は、いったいどんな条件が満たされているのか。教師は、音楽で、子どもに何を伝えようとしているのかを考えてみたい。

子どもは、これまでの経験のないものに対して反応が弱いという傾向をもつ。反対によく聴きこんだ曲はすんなり受け入れることができるのである。音楽には、コマーシャルのように短いものではなく、長い曲や、一度聴いただけでは印象の薄い曲も多い。毎回聴かせる度に良さを発見できるよう、めあてをもって繰り返し聴かせることが大切である。

聴いた曲を印象づける一番よい方法は、作曲者が音楽を作ったときの雰囲気伝えることである。それを知ると、子どもは単に耳できくのではなく、心で聴くことができるようになるのである。実際に子どもは生活から生まれた生きた音楽に感動したいのである。一方、作曲者は自分の生活（生きている現実）からのインスピレーションで作曲という行為をしているといえる。つまり、人は音楽を通して生きている実感、感動を伝えあっているのではないか。

G・A・ポジターエフは「音楽を深く正しく理解すること、そして音楽の真の人間的な意味を感じることは、音楽家でなくても音楽教育を受けてなくてもできる。音楽は知性ではなく、まず感情に作用するものである。」

と述べている。(カバレフスキー著「子どもの心を開く」より) また、キース・スワンウィックの著「音楽と心と教育」にこんな言葉がある。「音楽は心を通して働きかけるものである。」

これからすると教師は、作曲者と子どもの心をつなぐ仲介者の役目も担っているといえよう。それには、自分たちも作曲者と同じレベルで感動できる心を磨いていきたいし、その心を伝える話術も磨いてゆきたいものである。

「教育技術とは、人間の心に訴えるように話す技術である。」

ドミトリ・カバレフスキー

「音楽教育は音楽家を教育するためのものではなく、人間教育である。」

V・A・スチョムリンスキー

子どもの心に届くように話すことによって、音楽を子どもの実生活からかけ離れたものとしてではなく、彼らの生活そのものだとすることを理解させたい。理解するだけでなく感動まで高められたとしたら、音楽が子どもの心の底にいつまでも根ざしていこう。

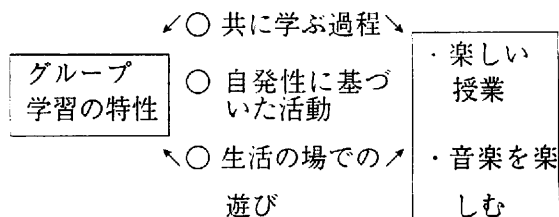
4 音楽とグループ学習

子どもが主体的に学び、生き生きと活動する授業、学び方を学ぶ授業のあり方は、よく追究される課題である。これまでの授業(教師主導型)では、教師と児童という結びつきが強く、児童相互の結びつきもあるにはあるが、やはり教師と児童の方が強いように思う。こういう場合、授業の中での子どもの動きは少ない。子どもはひたすら教師の方に注目し、教師の話をよく聴き、理解しようと努める。悪く言えば指示待ち症候群である。グループ活動があるにしても、やはり教師対児童の形に帰する。

これに対し、子どもの主体性を主とする授業は、あくまで子ども相互の結びつきが中心である。教師は、子どもが自らの学習を進める上で、必要な時に必要なことを援助し、助

言する役割を担うのみである。特に音楽においては、集団的・社会的性格を持つことから、グループ学習の形態が有効であり、重要と考える。

グループ学習の特性として、下記の「共に学ぶ過程」・「自発性に基ついた活動」・「生活の中での遊び」の3つをあげ、それらが楽しい授業・音楽を楽しむこととどうつながっていくのかを考えてみたい。



子ども同志の結びつきの強い学習(グループ学習)では、共に学ぶ過程でお互いに関わりを持ちながら、自分の位置・自分の姿がよくわかり、自発的に知恵を出しあい磨き合う学習が展開される。それが、生き生きとした動きのある授業となり、教師主導の静的な授業に比べてより質の高いレベルへと子どもが引き上げられていく。また自発的な行為は遊びの感覚に似ている。遊びは強要されてやるものではなく、自らの意志で行動し喜びを得るものだからである。生活の中での遊びの感覚で音楽を学習できることは、真に音楽を楽しめる授業を保証するものと確信する。

5 音楽の生活化

音楽の生活化については、音楽教師である自分にも思い当たることがある。かねがね自分の生活と音楽がどう結びついているか、自分は本当に音楽を楽しんでいるかということと考え続けてきた問題である。子どもは教師の鏡である。教師である自分が十分に音楽を楽しみ、生活に取り入れることなしに音楽の生活化を教えられるだろうか。

これは、自分だけの問題ではなく、自分が受けてきたこれまでの音楽教育のあり方に根ざしている問題があるようだ。

ここで、日本と西洋の音楽に対する考え方の違いは「音楽をする」という動詞の解釈の仕方にはっきりと表れている。

(日本) 笛を吹く, 琴を弾く,
太鼓を叩く→行為を叙述

(技術の問題)

(西洋) Play (英), spielen (独)

遊ぶ→音楽は楽しむもの

play the Hue

play the Koto

play the Taiko

このように、西洋が音楽を楽しむという感覚を持っているのに対して、日本は技術を身につける(人間修養)という感覚が強い。これは、伝統的に受け継がれてきている感覚なので、よほど意識してかからないと、これまで身につけてしまった音楽に対する感覚を自己改革していくことは難しい。

大事なことは、音楽を愛好する気持ちが生活の中で、空間的にも広がっていくことはできないかということである。

| | | |
|-----|-----------------|-------|
| 空間的 | グループ→学級・学年→学校全体 | |
| | →家庭や地域 | 生活化をめ |
| 時間的 | 小学校→中学校→高等学校→生涯 | ざして |

ここで我々音楽教師が、音楽の生活化をめざして、学校の現場でどんなことができるかということを考えてみたい。

♪ 発表形式のようなものを、学期に1回は設定し、単発的なものではなく、学期あるいは年間を通して一貫したテーマをもたせる。

♪ 学級で1日の日課の中に、子ども主体の音楽活動が取り入れられるようにする。

(朝・帰りの会, 給食時間のB. G. M等)

学校での生活化の母体はやはり学級である。子どもたちは学級で過ごす時間が長いので、音楽教師は学級担任と連携し、音楽室の中の音楽が学級に生かされるよう努めることが、生活化への成功の鍵である。

♪ 音楽活動を人間交流の一貫として捕らえ、身近な生活の中で、音楽の交流を持つ機会を設定する。(必ずテーマを設定する)

(学級間・学年間交流, 家庭・地域との交流等)

例 兄弟学級との音楽会, 父母を招いてのコンサート

♪ 音楽を取り入れた、合科的な学習に取り組み、それを使って活動させる。

(紙芝居, 楽器作り等)

♪ 音楽・価値観の多様化している中で、いろいろな時代、いろいろな国や地域の特色ある音楽に目を向けさせる。(鑑賞)

♪ 子ども一人ひとりが、ある1つの楽器に習熟するよう、学期あるいは年間を通して取り組ませる。楽器の選択は子どもに任せ、取り組ませる形は個人・グループアンサンブルとする。

まだまだいろいろな方法があると思うが、教師の個性を生かして音楽に対する情熱や信念を貫くことが大事だと思う。そうすれば、子どもは必ずや受けとめてくれるだろうし、教師の人間性を通して、音楽のひとつのあり方を認識していくものと思う。

IV 授業実践

音楽科学習指導案

平成7年 6月27日(火) 3校時
浦添市立 港川小学校 6年3組
男子 20名 女子 17名

1 題材

「小編成によるアンサンブル学習」

2 題材設定の理由

音楽の授業を通して特に感じるのは、子どもたちの個人差である。合唱指導のとき自分の思うような声のだせない悩みを持つ子

教師がある程度の治療をしてやるが、教師の一方的な指導になり、本人はやらされているという感じを受けることが多い。器楽指導の時も同じである。こういう問題は特に高学年になるにつれて顕著に現れてくる。

ここで問題になることは、音楽が苦手な子への技術指導が、一方的に教師から子どもへ課せられたり、訓練的になってしまうことである。子どもだけでなく、人は他人から強制的に何かをさせられるのは苦痛である。こういうときに、子ども相互の教え合い・助け合いのできるグループ学習は有効と考える。

「音楽科グループ学習」の中で、竹下英二は「技術習得は集団のなかで、心の結びつきを大切にしながら、自発的な活動の中で獲得させていくべきである」と述べている。また、「音楽の知識や能力は、子どもが音楽で十分に生活できたときにはじめて血肉化するもの」とも述べている。

ところで、子どもの実態調査から六年生のどのクラスも楽器の演奏に興味を持つ子が多く、いろいろな楽器が使える合奏が楽しいと答える子が多い。そんな中で、読譜に抵抗をもつ子や、上手に演奏できない等の悩みをもつ子など、技術的な個人差にかなり開きがある。そこで、器楽のグループ学習をとり入れることによって、子どもが相互に友好的な雰囲気の中で、主体的に学び、楽しく音楽活動ができるであろうと考え、個人差に対応した、小編成によるアンサンブル学習を設定した。

3 指導目標

- (1) 音の重なりや和音の響きを感じながら、楽しく演奏する。
- (2) グループで協力し、練習のめあてや楽器の組合せを工夫する。
- (3) グループの中の自分の役割を自覚し、真剣に取り組む。
- (4) 演奏・発表の場を通して、アンサンブルの楽しさを味わう。

4 教材観

子どもは高学年になると、リズムにのれる曲だけでなく、メロディの美しい曲にも興味を示す。下記の6曲は、いずれも和声の響きが豊かで、加えてメロディの美しい曲ばかりである。6つのグループに1曲ずつ合うように、教科書から4曲、教科書外から2曲を選んで6曲とした。もちろん、子どもたちに選曲はまかせるので、複数のグループがある1曲を選ぶことも考えられる。

調性の上から見てみると、小学校で習うハ長調・イ短調・ヘ長調・ニ短調・が全部はいつており、教会旋法も1曲取り入れた。拍子は、四分の三拍子・四分の四拍子・八分の六拍子と適当な変化がある。曲の感じは、リズム的にはおとなしいが和声の響きを聴いて味わうという単元の趣旨にかなっていると思う。これらの曲は、発表会という形式で演奏されるので、全曲を聴いて楽しめるためにもできたら変化に富むことが望ましい。

- エーデルワイス（ハ長調、四分の三拍子, aa' bb'）
 - ・よく知られている曲なので取り組みやすい。
 - ・明るく優美なメロディが魅力的な曲である。
- モルダウの流れ（イ短調、八分の六拍子, aabca）
 - ・流れるような中に緊迫感のある曲。中間部はドラマチックな展開
 - ・弱起の曲なので、よく聴きあって各出だしをそろえる。
- グリーンスリプス（教会旋法、八分の六拍子, aa' bb'）
 - ・三度のハーモニーが美しく、長調や短調にない独特な味わいがある。
 - ・くりかえしがあって覚えやすい。
- サウンド・オブ・サイレンス（ニ短調、四分の四拍子, abcd）
 - ・映画音楽で有名な曲。

・三度のハーモニーが織りなす涼やかな響きの中に、途中ビートをきかせた打楽器が加わる編曲になっている。

○ イエスタデイ（ヘ長調、四分の四拍子、aa ba）

・語りかけるような美しいメロディの曲。
・ポリフォニックなかけ合いがあり、和音の響きの変化も美しい。

○ チムチム・チェリー（二短調、四分の三拍子、aa'b）

・有名なミュージカルナンバーで、親しみやすい曲。

リズムカルで美しいメロディ。

5 学級の実態

(1) 実態調査によると、音楽の授業が好きかという問いに対して、クラスの約38%が好きと答え、約54%は普通と答えている。好きな子の71%は女子で、一般的に男子より女子のほうが音楽の授業が好きのようである。嫌いと答えたのは男子だけで（3名）、

全体の8%にあたる。嫌いな理由に、声の悩み・読譜の悩みを持っている子が多いようである。特にこのクラスの男子は、6年の他のクラスに比べても、読譜に抵抗を感じている子が多く、半数近くを占めている。

(2) クラス全体の雰囲気としてはおとなしく、音楽の授業もやや活気が足りない。反面、歌声や合奏がきれいにまとまっている時に音楽が楽しいとか、合唱の高音・低音の練習が好きであるとか、いい曲を聴いて自分もその音楽をつくりたいというふうに、かなり音楽的関心の高い子が何名かいる。よって、こういう子たちにアンサンブルの活動の場を与えるのは非常に有効であると考え

(3) 今回は、器楽アンサンブルが中心なので、学級の実態に即して読譜の抵抗を取りのぞいたり、グループの学びあう雰囲気を大切にして、少しでも苦手な子たちに楽しい音楽活動を体験をさせたいものである。

6 指導計画

| 時間 | めあて | 学習活動 | 教師の援助・支援 |
|-----|---|--|---|
| 第1時 | <ul style="list-style-type: none"> アンサンブル学習のめあてをつかむ。 候補曲の主旋律を覚える。 | <ul style="list-style-type: none"> アンサンブル学習のめあてをつかむ。 アンサンブルの候補曲の6曲を聴き、リコーダーでそれぞれの主旋律を視奏する。 | <ul style="list-style-type: none"> グループアンサンブルで大切なことについて話す。 心をひとつにする (チームワーク) 集中して真剣に取り組む 注意深く聴かせるために各自曲の感想を書き、やりたい曲を選曲させる。 (鑑賞カード) |
| 第2時 | グループの中での自分の役割を自覚する。 | <ul style="list-style-type: none"> グループ編成をし、各グループで選曲・役割分担（楽器決め）をする。 グループ学習の約束を全体で確認する。 | <ul style="list-style-type: none"> グループ編成は能力均一型をとるので、リーダーは教師が前以って決めておく。 各グループ2人ずつ（リーダー・楽譜が読める人） |

| 時 間 | めあて | 学習活動 | 教師の援助・支援 |
|-----|---------------------------------|---|--|
| 第3時 | グループで協力し、学習の計画をたてる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習の進め方をグループで話し合い、計画をたてる。 ・個人やパートの音取り・練習をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループが心をひとつにして練習に取り組めるよう、グループとしての曲にたいするイメージを統一させる。(学習カード) |
| 第4時 | 音の重なりや和音の響きに注意して練習する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・各グループのめあてに従いアンサンブルの練習をする。 (曲の感じ・楽器の組合せ・練習の工夫) ・全員で、練習の際困ったこと・問題点をあげて話し合う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループ間にまとまりの差があれば、励ましの言葉をかける。 「個性が強い人が多いとまとまりにくいですが、まとまると大きなパワーとなる。」 |
| 第5時 | 協力しながらひとりひとりが真剣に取り組む。 | <ul style="list-style-type: none"> ・前時の反省をもとに、アンサンブルの練習をする。 ・入退場のリハーサルを行う。 ・発表会の進行係を決める。 | <ul style="list-style-type: none"> ・アンサンブルの練習の仕方を具体的な順序で共通理解させる。 ・中間発表における相互評価の観点を示す。 |
| 第6時 | 音の重なりや和音の響きを感じながら楽しく演奏する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・中間発表 ・グループ間の相互評価・自己評価をし、反省点をはっきりさせる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループアンサンブルのめあてを再確認させ、意欲的に臨ませる。 |
| 第7時 | 他グループの意見を参考に自分のグループの演奏をさらに工夫する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・前時の反省をもとに練習をする。 | <ul style="list-style-type: none"> ・中間発表の他グループの評価がわかるようグループごとに切り貼りした評価表を準備する。 |
| 第8時 | アンサンブルの楽しさを味わう。 | <ul style="list-style-type: none"> ・グループアンサンブル発表会 | <ul style="list-style-type: none"> ・これまでをふりかえり、がんばったこと(全体・個人)をほめ、最後の演奏に自信をもって臨むよう励ます。 |

| | | | |
|------------------|--|-----------------|--|
| <p>エーデルワイス</p> | | <p>イラン</p> | |
| <p>モルダウの涙</p> | | <p>イエスタデイ</p> | |
| <p>グリーンズリーブス</p> | | <p>チムチムチエリー</p> | |

第1希望に何を选びますか。() その理由()

グループアンサンブル学習カード 6年()組 ()

グループ () 班

メンバー ()

練習計画

| | | |
|---|--------|---------|
| 1 | 曲名 () | 調 拍子 |
| 2 | 曲の感じ | |
| 3 | 楽器の組合せ | |
| 4 | 演奏の工夫 | |

| 学習の流れ | 進んで取り組めたか | 協力できたか | うまくできたか | 反省・感想 | 今日の学習でこまったこと 今日の学習でうれしかったこと 次の学習で頑張りたいこと |
|---------------------------|-----------|--------|---------|-------|--|
| 1 グループ編成候補曲を聴く | | | | | |
| 2 グループで 曲決め 練習計画 | | | | | |
| 3 音取り 個人練習 | | | | | |
| 4 アンサンブル (合わせる) の練習 | | | | | |
| 5 | | | | | |
| 6 中間発表 | | | | | |
| 7 練り直し | | | | | |
| 8 発表会 (本番) | | | | | |

7 子どもを主体的に動かす教師の援助・支援

○めあてをつかませる（主体的な行動への原動力）

- ・子どもの心の動きをよく見、子どもの内面からやる気呼び起こすように話す。
- ・めあては、情意的内容を兼ね合わせて提示する。（学習内容のみに終わらず、人間教育を根底に）
- ・毎時間初めに、気持ち良く楽しく活動が始められるように気分をもちたてる。
- ・教師の考えを反映させたい時も、「こうしたいけど、どうか」という風に子どもの意志を尊重し、子どもから同意や意見を求める。

○子どもの気持ちをくみとる

- ・子どもひとりひとり、あるいはグループの実態を把握した上で、適切な助言をタイミングよく与える。（タイミングよく→子どもはそれぞれめあてを持ち、その考えに従って行動しているということを念頭に、心の動きが捕らえられるよう観察を怠らない。）

○子どもの人格を尊重した注意を心がける

- ・子どもが明らかに間違った行為（自分本位な、わがまま・かってな）をした時はその場で厳しく注意する。この時、相手の行為を責めることだけに終わらず、常に、教師が相手の子どもを良くしようとしているのだという思いが伝わるような話し方を心がける。

○良いことを取り上げる

- ・子どもの変容（望ましい方向への）に気づいたら、その場で、あるいは全員を集めた場でほめ（ほめちぎる）、他の子どもたちへの刺激とする。これは本人のやる気と自信につながる。

○子どもが目標を見失わないように導く

- ・子どもがつまらなそうな、やる気のない態度を見せたら、これはその子どもが目標を見失っている姿だと捕らえ、その

子なりの目標を見つけられるよう、十分話し合いをする。

○全員がリーダーの気持ちを持つように意識づける

- ・リーダーを置くが、グループのひとりひとりも広い意味でのリーダーとして意識づけをする。（みんなで協力してリーダーをもちたてる）

○子どもが中心になって活動できる雰囲気作りをする

- ・グループの活動に関しては、リーダーに一任する。
（集合・解散・反省カード等）
- ・発表の際の進行はすべて子どもの司会によって進める。
- ・ピアノの弾ける子に入退場の行進曲を弾いてもらう。
- ・ひとりひとりに演奏以外にも発表の場を与える。（グループのあいさつ等）

○学習の仕方・音楽的内容のアドバイス

- ・練習の方法がわからなかったり、迷いが生じたりした場合、具体的な手立てを教えてあげる。

例 ①トライアングルのリズムを考えている子

- ・最初から最後まで鳴り続ける楽器は魅力が半減する。
- ・鳴らさない部分と鳴らす部分に分ける。
- ・鳴らす部分は2種類くらいにリズムや演奏の技法を変えてみる。

②楽器の組合せ

- ・ハーモニーをきれいに響かせたいところは、同種の楽器を組み合わせる。
- ・音色の違う楽器は、曲のクライマックスやフォルテの場合に重ねると効果的である。
- ・1つの楽器の単旋律は、前後の音楽をひきたてる。（鉄琴のみ、

- あるいはピアノのみ)
- ・打楽器は最小限度に効果的に使うこと。
- ③アンサンブル（音合わせ）への取り組み方
 - ・ある程度音が取れたら、（比較的遅いテンポで）2パートずつ音合わせをする。（他の子はしっかり聴く・拍子をとる）

- ・個人練習と合わせる練習を交互に行なう。
- ・音の入りがわからなかったり、合わせた音が合わない時は、友達や先生に聴いてもらう。
- ・全曲が通せた段階、曲の仕上げの段階で、必ず録音して聴いてみる。

8 本時の指導

(1) ねらい

- ・音の重なりや和音の響きを感じながら、楽しく演奏する。
- ・他のグループの発表を聴き自分のグループの演奏をふりかえる。

(2) 展開

| | 学 習 活 動 | 教師の支援・援助 | 評 価 |
|---------------------------------|---|--|--|
| め あ て を つ か む | ・発表のリハーサルについての心構えを確認する。 | ・のびのびと、気分をリラックスさせる。 ・これまでの振り返り、自分たちがどういうことを頑張ってきたのかを意識させ、演奏に集中できるようにさせる。 | |
| 展 開 | グループ グループ グループで発表のしかたを確認し、練習する。 | ・グループの紹介を工夫させる。 | ・積極的に話し合いに参加しているか。 |
| | 全 体 中間発表をする。 （進行係が進行を進める） 行進曲係 タイム係 } 司会 各グループの発表終了後ただちに相互評価・発表をさせる。 <グループの評価の観点> ・曲の感じが出ているか。 ・よく聴きあって合わせているか。 | ・子どもが主体となって活動できるようにさせる。 ・入場はめりはりをもたせるため、子どもの行進曲の演奏でどのグループも入場させる。(30秒程度) ・退場から次のグループまでの入場は記録の時間をとるため、1、2分持たせる。 ・司会者は自分であいさつ文を考え、タイム係と関係して進行をつかさどる。 | ・堂々と落ち着いて発表できたか。 ・音の重なりや和声の響きをよく聴き、味わっているか。 ・他のグループの良い点を見つけようとしているか。 |

| | 学 習 活 動 | 教師の支援・援助 | 評 価 |
|-------------|---|--|---|
| 展 開 | <ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりの持ち味が活かされているか。 楽器の組合せが工夫されているか。 協力しあっているか。 | <ul style="list-style-type: none"> グループの紹介は全員が発表できるように工夫する。 | |
| ま と め | <ul style="list-style-type: none"> 次時のめあてを立てる。 | | <ul style="list-style-type: none"> 自分のグループの演奏をしっかり反省し次時のめあてがつかめたか。 |

グループアンサンブル中間発表アドバイスカード

() 年 () 組 ()

☆友達グループの良かったところや直したら良くなる所を教えてください

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
|-------------------|---|---|---|---|---|---|
| 曲の感じが出ているか | | | | | | |
| よくきあって合わせているか | | | | | | |
| 一人ひとりの持ち味がいかせているか | | | | | | |
| 楽器の組合せを工夫しているか | | | | | | |
| 協力しあっているか | | | | | | |
| 良かったところを教えてください | | | | | | |
| 直したら良くなる所を教えてください | | | | | | |



○ よい ○ ふつう △ がんばって

事後評価

♪グループアンサンブル学習をふりかえって♪

- 1 グループアンサンブル乃学習は楽しかった
ですか。
ア. 楽しかった 26 (男子13 女子13) →74%
イ. ふつう 9 (男子 6 女子 3)
ウ. 楽しくなかった 0
- 2 (グループ編成を変えて・曲を変えて) もっ
とたりたいですか。
ア. やりたい 29 (男子14 女子15)
イ. やりたいと思わない 6 (男子 5 女子 1)
- 3 これまでのクラス全員でやる合奏のとき、
グループアンサンブルのときに比べてどう
思いましたか。(よかったこと・むずかし
かったことなど)
○よかったこと
・いろいろな楽器を使ったこと・少人数で
がんばったこと・グループアンサンブル
の方が楽しい・グループで楽しくやった
こと・好きな曲が選べたこと・少人数だ
から目立った・少人数でごたごたしてい
ない・1つ1つの楽器の持ち味がわかっ
た・いろんな曲に個性があったこと・な
まける人がひとりもいない
○むずかしかったこと
・他の楽器とあわせること・少人数であわ
せること・いろいろな楽器をあわせるこ
と・なかなか合わなかった
- 4 ともだちに何か教えてあげたり、ともだち
から何か教えてもらったことがありまし
たか。
・笛の難しい指使い・階名付け・鉄琴の弾
き方・オルガンで強弱や音の長さ・練習
のこつ・まちがえた音を直してもらった・
演奏の工夫・出だしのタイミング・もっ
とがんばってと言われた・もうすこし聴

きあうといいこと

- 5 自分で何かを工夫したり、発見したりした
ことがありましたか。
・合わせること・たくさん練習したこと・
楽器の種類を増やしたこと・強弱を工夫
した・楽譜を簡単にした・自分で音を考
えた・楽器のリズムを考えた・ピアノを
よく聴いていたらタイミングがとれる
・まちがえないようにがんばった・みん
なで協力するとなんでもできる
- 6 これまでの授業をふりかえっての感想(原
文)
☆いろいろな楽器を使ってあわせた所がとて
もきれいだった。合わせるのが難しけれ
たけどとても上手にできた
☆今日は音楽の時間で一番たのしかった。こ
ういうグループアンサンブルをやっている
思い出になったと思う。
☆グリーンスリーブスをやるのがすぐ決ま
り、楽器も決まったけどどうもうまくいき
ませんでした。他の楽器を徐々に入れてみ
たら、きれいになっていきました。でも、
本番でちょっとまちがえたけど、うまくグ
ループアンサンブルができ、とてもうれし
かった。
☆私は、グループアンサンブルでとてもはず
かしくてドキドキドキドキしていました。
また今日みたいなのがあったらいいと思
います。とても楽しかったです。
☆最初はやりたくなかった。どんどんやっ
てるうちに楽しくなってきました。鉄琴が難
しかったけど、成功したのでとてもうれし
かった。
☆いろいろ合わなかったりしたけれど、協力
したおかげでいい演奏ができました。協力
を学んだ。
☆これからもこのアンサンブルをいかしてが

んばりたいと思いました。
☆いままでやったこともない音もがんばって音を出しました。

＜考 察＞

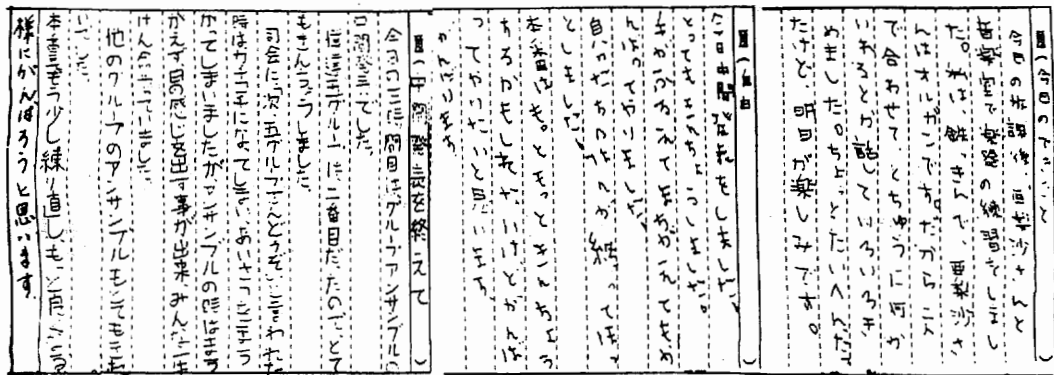
- ・グループアンサンブルの学習は楽しかったかの問いに男女同人数が楽しかったと答え、全体の74%に到っている。普通であると答えた子も合わせると100%になっている。ほぼ全員が成就感を得られたと考える。
- ・もっとやりたいと答えたのも男女ほぼ同じである。
- ・グループアンサンブルをやって良かったことに、グループで学べたこと、いろいろな楽器を使ったことをあげる子が多い。

これまでと一歩進んだ気づきを得られた子もいた。難しかったことには、全員‘合わせること’をあげている。アンサンブルがいかにもむずかしく、グループの協力・努力が必要かが子どもの感想からもうかがえる。

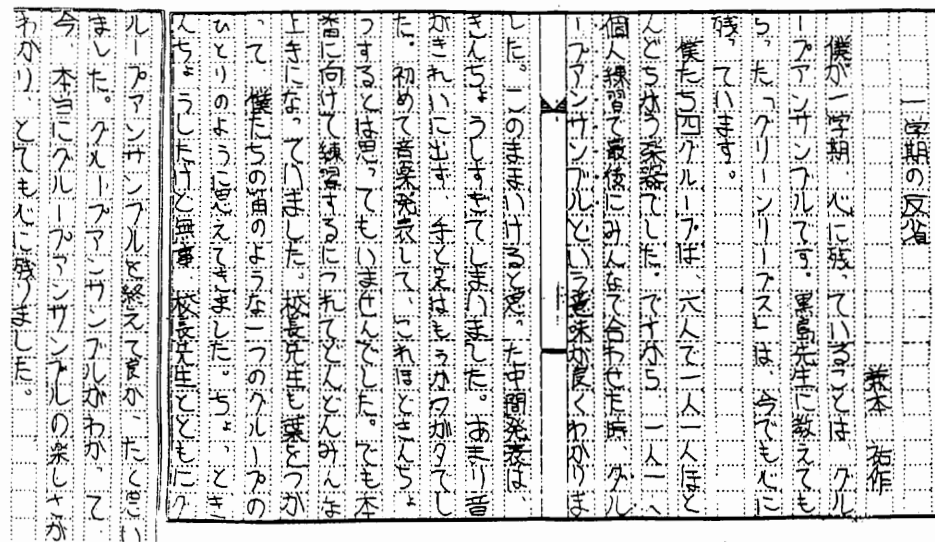
- ・子ども同志でいろいろ教えあったりしているので、読譜面で苦勞したことは、感想にあまり出ていない。音符や記号を学び合うだけでなく、励ましあっている姿も伺える。
- ・発表の場を乗り越えるということもあって、子どもたちの真剣な取り組みがなされ、その中から普段得られない工夫や発見も見いだしたようである。

学校生活の中から——業終了後の子どもの声——

(1) 中間発表の前・後



(2) 学期終了後



配ったことは、他のグループの曲にも親しめるチャンスを与えた。

- ・ 中間発表の相互評価を全員分グループごとに情報交換できるようにしたので（切り貼り）、練り直しのときは、グループの練習のねらいがはっきり持てて良かった。
- ・ 選択曲に対する、グループとしての曲の感じを統一させたことは、曲に対するイメージ、曲想作りへの助けになった。

＜ 課 題 ＞

- ・ アンサンブルの選択曲6曲は、子どもが十分親しんでいない、馴染みの薄い曲が多かったことから、前半の授業計画に思ったより時間がかかった。前もって、一ヶ月位、子どもに聴かせたり、笛でメロディを吹かせたりして親しませる期間が必要である。また、曲を1曲にしぼって全グループが同じ曲に取り組む方法もあり、この場合は、お互いの曲を比較・鑑賞でき、より深い音の気づきが得られる点で有効である。
- ・ 中間発表の時、グループ間の評価に加えてグループ内の評価も発表させると、自分たちの演奏をふり返ったり、比較しやすいのではないか。
- ・ 子ども中心の活動・発表であることはよいが、ここはという時に教師が出て学習に深みを出す工夫はほしかった。
- ・ 練習場所・楽器の調達の面はもっと工夫し、子どもに十分な練習を確保してやる必要があった。
- ・ 演奏する時の立ち方の工夫が必要（全員がよく見えるように）との指導があったが、発表する舞台が狭かったこと、事前指導がたりなかったことがあげられる。
今回のグループアンサンブルの取り組みは、大多数の子どもたちに様々な気づきと変容をもたらしたと思う。しかし、教師の支援・援助や、物的環境の面でまだまだ課題が残されているので、今後さらに研究を深めていきたい。

終わりに

研究所での6ヶ月間は、十分な時間の中でたくさんの本を読むことができ、じっくりと研究に取り組むことができました。そして、懇切丁寧な指導のもとで研究論文なるものを書き上げることができました。一つのテーマから、こんなに深みと広がりをもって研究したことは初めてであり、貴重な経験です。現場にもどっても、空回りせず、しっかりと子どもと向き合う自信がついたように思います。

この研修お世話になった石嶺珠代先生、研究所の田中一郎所長、与那覇武係長、当間正和指導主事をはじめ、関係機関の諸先生方、また、この機会を与えて下さった山内彰校長先生に厚くお礼を申し上げます。

参 考 文 献

- 竹下英二： 明治図書館。
優しさと思いやりの育つ音楽科グループ学習
- キース・スワンウィック： 音楽之友社。
音楽と心の教育
- ドミトリ・カバレフスキー： 音楽之友社。
子どもの心をひらく。
- 筑波大学附属小学校音楽科教育研究部： 図書文化。
子どものための音楽科教育
- 猪狩真平： 明治図書。
器楽教育の理論と実践例
- 繁下和雄： 音楽之友社。
アンサンブルしよう
- 小原光一（代表）： (株)ニチブン。
「ソナーレ」音楽科教育実践講座
- 追新市郎： 玉川大学出版部。
創造性を高める音楽教育
- 林 光： 一ツ橋書房。
音楽の学校

